

芥川だより

発行日***2017年11月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870



***** 一部100円です *****

みずみずしい感性とは



先月、講演会を聞きに行った時のことである。講演後の懇親会で講演をされた康宗憲さんの隣席に座らせていただき話をさせて頂きました。先月号に掲載した「福田勉先生 遺稿・追悼集」を読み追悼集に寄稿されていた康さんの文に強く心を打たれ会って話をしたくなり友人に頼み取り計らってもらいました。

私が康さんに「13年間も朴政権時代、冤罪であるスパイ容疑で投獄されていて精神的におかしくなることはなかったですか？」と聞くと康さんは「自分に『お前は何か悪いことをしたか？』と問いかけ『自分は何もしていない』と自問自答することで死に対する恐怖を克服したが、やはり監獄生活は非常につらく、狭い3畳の部屋に8人も入れられ、いつも手錠をかけられたまま寝起きするので寝るときも自分の目の前に他人の足があった…」などと話されました。

「私も、難病を患い長く入院していた時に、友人が差し入れてくれた聖書を読んで暮らしましたが、康さんはどうでしたか？」「私も読みました、聖書は監獄で読むのが許されていましてから」「運動はどうされていたのですか？」「高校時代に陸上部だったので、監獄の中で筋トレをしていました」

「私は、康さんの文から細やかな感性を強く感じて会いたくなったのです。人生で感性は大事だと思っていますが康さんはどうですか？」「みずみずしい感性が一番だと思います」と答えが返ってきて思わず手を差し出し握手した。

康さんはソウル大学医学部に日本から留学中に、朴政権の独裁に反対する学生運動に参加しスパイ容疑で死刑囚となり13年間も想像を絶する生活を強いられたが、過酷な環境においても潤いや安らぎを見出しておられたように見えた。釈放後も身近で最も困難な問題「どうすれば朝鮮を含めた東アジアの平和が達成出来るか」に対して研究し活動を続けておられる。このように単に考えるだけでなく行動を通して、さらに問題に対しての想像力を高めていく。このような生き方がみずみずしい感性の持ち主というのだと康さんの話から感じた。感じるだけで行動が伴わないと感性とは言えない。感じたことを表現する行動力、創造性が人生を豊かに奥深いものにするのだと。

死をめぐるあれやこれ(38)

石川 吾郎

漢字テストと選挙

小中学生のころ漢字テストがよくあった。自信のない漢字があると自分の書いた漢字が正しいかどうかまじまじと見る。するとその漢字の部分がバラバラになり、見慣れない物のようになっていき、いよ分からなくなる、という経験をよくした。そんな時は×をもらったものだ。実はこの現象に「ゲシュタルト崩壊」という物々しい名前がついていることを知ったのはそんなに以前ではなかった。

これを出したのは、中島敦の短編『文字禍』を読んだからだ。「そのうちに、おかしい事が起った。一つの文字を長く見つめているうちに、いつしかその文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなってきた。単なる線の集りが、なぜ、そういう音とそういう意味とを持つことが出来るのか、どうしても分からなくなってきた」と描写されている。まさにこれだ。

今般の衆議院選挙で自民党が大勝をして、安倍政権が三分の二の議席を維持した。私などは、これほどウソと不正にまみれた政権に投票をするという行動を理解できないでいたが、この「ゲシュタルト崩壊」の現象が自民に投票する人の頭の中で起こっているのではないかと思うようになった。

モリカケ疑惑から逃げまくり、基準をごまかしてGDPの数字を上げる、公金を投入して株価を上げる、格差を拡大・貧困を増やしながら教育無償化を叫ぶ。消費税(裏につづく)

を上げるのは既定路線で、またデフレに
つつこんで行くのは目に見えている。そ
して米国の手先となる戦争へ向かう改憲
こんな政治を肯定できるのは、目先の部
分だけに目をやって、全体の姿が目に見
えなくなっている、まさに「ゲシュタル
ト崩壊」ではないのだろうか、と。(なお
『文字禍』はネット検索をすると、「青空
文庫」にて無料で読めます。)

芥川だより一三〇号 目次

ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 44	坂本一光	2
哲学屋のつぶやき 40	祖蔵哲	3
大峯奥駈道 13	梵店主	5
おつちよこチョイぼけ 54	A O	6
大人の今昔物語 39	石川吾郎	8
B級サラリーマン渡世譚 52	明石幸次郎	9
オクラの山たより 14	困了生	10
我がおくのほそ道の旅 11	成瀬和之	14
孫ウオッチング 23	福田圭	14
普通の恋	大江雄兎	15
埋め草	C	16
編集後記	嘉	17
女90年の軌跡	眞粧	18
俳句	土田裕	18
	影山武司	18

素老人☆よもだ帳 (44)

坂本 一光

◆アベ一強政治の正当性を疑う―政治の
安定を求めることとアベ政治を信頼する
ことは、二つの別のことである

言うまでもなく先の第四十八回衆議院
議員総選挙は、法治国家日本において何
の不正もなく民主的に実施された選挙で
あり、権力が強奪されたと言うのではな
い。アベ一強が達成されたのは、前回と
同様に選挙制度の著しい歪みによるもの
であることを改めて知っておきたいと思
うだけである。

小選挙区で自民党はおよそ二六五〇万
票(得票率四七・八パーセント)を獲得
した。その結果、自民党は小選挙区二八
九議席中二一五議席を獲得、議席占有率
は七四・三パーセントに達した。しかし、
自民党への投票数が全有権者に占める比
率(いわゆる絶対得票率)は二四・九パ
ーセントに過ぎなかった。一方、民意を
もつとよく反映する比例代表(一七六議
席)では、自民党の得票は約一八五六万
票、得票率三三・二パーセント、絶対得
票率一七・四パーセントであり、比例で
当選した六十六議席の議席占有率は三
七・五パーセントであった。小選挙区制
は民意を歪める制度であり、今回も実
見事にアベ一強の虚構をつくりあげた。
(とはいえ、以上のことは、野党の共闘
が大義をもって有効に組まれれば、この

制度のもとでも現在とは全く逆に野党が
多数を占め、現政権を追い落とすことが
できることを示している。そのことが小
選挙区制度の非合理性を免罪するわけ
はないが)

このように、自民党は、全政党を選択
する比例区で全有権者の六分の一、もつ
と少数の候補で競う小選挙区でも全有権
者の四人に一人の支持を得たに過ぎない。
ちなみに、自民党が政権から転落した二
〇〇九年の総選挙においてさえ、自民党
の比例での絶対得票率は一八・一パーセ
ントあった。絶対得票率のこの低迷は、
一二年総選挙で一六パーセント、一四年
総選挙で一七パーセントと続いてきたも
のであり、回復するにはまったく至って
いない。

以上、自民党に係る数字を見ただけで
も、国民は政治の安定をアベ政権に求め
たのではないことははっきりしている。
投票日当日二十二日の共同通信の出口調
査では、安倍首相を信頼「している」四
四パーセントに対して、「していない」五
一パーセントであった。また選挙中の内
閣支持率は不支持率を下回っていた。ア
ベ政権に未来が、また一強と呼べるよう
な国民の支持があるわけでないことを最
もよく知るのは、この政権そのものでは
なだろう。

崖っぷちにあったアベ政権に、結果と
して救いの手を差し伸べたのは、政治の
素人が普通に見ていて、希望の党への民

進党合流騒動であると言わざるを得ない。
アベ政権を救う権謀術数の典型ではない
かと見間違えうほどの小池・前原両氏の合
従連衡作戦であった。安保法制(戦争法)
や改憲を巡る『踏み絵』で宣誓を要求す
るという『排除』発言を通して明らかに
なった希望の党の第二自民党的本質は、
虚構の小池像を無残に打ち砕いた。宣誓
し合流した前民進黨議員への信頼も相当
程度に地に墜ちたであろう。「小池さん、
ありがとう」、どこかの国民的アイドル政
治家が言うはずだ。彼にはコイケ氏がも
う一人のアベ氏にダブって見えたのかも
しれない。

心棒が抜けてクラゲになる政治

素老人は改めてその思いを強くした。
この国の多くの政治家に、心棒などは、
抜けたのでなく、はじめからなかったの
であれば、何をか況や、である。

一方で、野党(立憲民主党・共産党・
社民党・自由党および無所属候補)と市
民との共闘という心棒は、昨年の参議院
議員選挙と同様に、またはそれ以上に全
国的に貫かれ展開した。とくに共産党は
六十七の選挙区で候補者を取り下げ、立
憲民主党や無所属の候補者を支援した。
北海道、新潟、福島、沖縄など多くの小
選挙区での勝利は見事に共闘の力を証明
している。こうした決断について、共産
党の志位和夫委員長は、「見返りは民主主
義です」と言った。また、立憲民主党の

十月でもあった。

地のすべて命をつなぐ輪になって
命なきものと命が輪をつくる
終わらない命なくならない命
生きて逝く次の命の始まりに
つなぐ手と手が新しい命生む
万物が和して命の揺りかごに

義母は一九一五(大正四)年に生まれ、昭和から平成へと長い人生を生きた。明治生まれの義父や家族、孫たちのために生きることが自らを生きることであるような、古い、しかし一本強い芯の通った人であった。

人のため生きて自分を生きた人

明治大正生まれの私の両親もすでにいない。

我がちちとはは身罷れば

我が内の明治大正遥かになりぬ

もう、ゆつくり休んでいいのだ、と思う。
(かたちは心であり、心はかたちになる
■大分の素老人)

人のため生きて自分を生きた人

哲学屋のつぶやき (40)

祖蔵 哲

「死を哲学する」③(自然科学と宗教編)

先月は「死」を純哲学的に考えてみた。

簡単なことをよりわざと複雑に難解に説明してあるようで、読んでみてもさっぱり理解できなかったし、かえって「感情的」「反感をもった人が多いと思う。しかし、哲学というものは何度か言うが、「一見」解りきったことをもう一度、人間の思考の原点を問うものであり、そう言う意味ではやはりとことん「理性的」である。「理性」とは「計算できる」「分割できる」という合理的な概念能力のことである。まあ、一般に「理づめ」「理屈つばい」とは好印象ではないことを指すようである。解ったようであるが何か「冷たい」「人間的暖かさが無い」などと世間では評判が悪い。そこでは根強く人気があるのは「宗教」や「神話」さらには「文学」での「死」の語りであろう。「死」を語るものにはこれ以外にもまだある。「自然科学」がそうである。これは「死」というものをもっとも合理的に説明する。しかし誰も心から納得しない。ある日、医者から、あなたはあれが原因でこれという病気になる余命一年ですと言われてすっと納得する人は余りいないように思う。臨終の間際に立つのは哲学者ではなくていつもお坊さま、神父さまである。

いささか強引ではあるが単純に納得度を並べると「自然科学」―「哲学」―「文学」―「宗教」のようになろうか。それぞれ語るひとの立場は分類される。それでは、この全立場を踏まえている人ならどのように「死を語る」なるのか。それが今回のテーマである。

人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとい宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙は何も知らない。だから、われわれの尊厳のすべては、考えることのなかにある。われわれはそこから立ち上がらなければならないのであって、われわれが満了することのできない空間や時間からではない。だから、よく考えることを務めよう。ここに道徳の原理がある。

この文は学校の教科書にも載っているくらい有名なパスカル「人間は考える葦である」の断章である。その本の名前は「パンセ」というくらいは知っている人も多いだろう。しかし、これはまとまった本ではない。パンセとはフランス語で「考えられたもの」つまり「思想」を意味する。もともとパスカルは何らかのま

躍進について共産党の声明は、自らの後

退は残念な結果であるが、「立憲民主党が躍進し、市民と野党の共闘勢力が全体として大きく議席を増やしたことは、私たちにとても大きな喜びです」と述べている。見返りは民主主義です―共産主義者が身体を張って民主主義を守るという「やせ我慢」的行動への市民の評価には高いものがあり、今後の市民と野党の共闘の発展に生かされるだろうと思う。立憲民主党の枝野幸男代表も選挙後の党の立ち位置について「永田町の数合わせの権力ゲームには参加しない。三分の二の改憲勢力は相手にしない。国民に向かって自分たちの政策を伝え理解を取りつけていく」旨の発言を繰り返している。

今後に注目したい。

なお、比例での得票率は、立憲民主党一九・九パーセント、共産党七・九パーセント、社民党一・七パーセントで合わせて二九・五パーセントであった。小選挙制度と、さらに言えば政党助成金が支える一強政治に未来はないと思う。一強政治は、著しい政治の劣化・退廃をもたらしたことも忘れてはならない。

以上、今回の選挙結果をもつてしても、未来は、つまり希望は、市民と野党の共闘にあることに変わりはないだろう、と素老人は考える。

◇百年を生きて二時間母の骨

私事であるが、十月七日義母が百一歳十月で逝った。命の意味を改めて考えた



とまった本を書くよう準備していたらしく数年にかけてのメモが死後まとめられたのがこの「パンセ」である。一六二三年生まれというから日本では江戸時代のはじめである。早熟の天才で、その業績は主に自然科学の分野で著しい。天気予報で台風の大きさを表す気圧の単位ヘクトパスカルはパスカルの原理とともに今も彼の業績を残す証である。また、「確率」という概念を生み出し、それを数値化したのがパスカルその人である。

ここで話は大きくそれる。「確率」というと苦手の数学を思い出して頭を痛める人も多かるうが、私たちの「思想」に大きな影響を与えている重要な概念なのでしばらくは耳を傾けてもらいたい。「確率」とは「蓋然性」を数値化したものである。「蓋然性」とは聞きなれない言葉だが、「可能性」なら皆知っている。この「可能性」とこの「蓋然性」が日本では混乱して使われている。たとえば『北朝鮮が核ミサイルを日本に落とす「可能性がある」といった使い方である。これは大きな間違いで我々の考えをミスリードする「印象操作」の事例である。『大辞林』によると「可能性」物事の実現する見込み。「成功の」がある（英語 possibility の訳語）とある。これに対して「蓋然性」事象が実現されるか否か、またはその知識の確実性の度合。確からしさ。数学的に定式化されたものを確率と呼ぶ。プロバビリティ。「英語 probability の訳語」

である。違いが解ったであろうか。つまり「可能性」とは「ある」か「ない」かであり程度ではない。同じ核保有国のアメリカだって日本に核ミサイルを落とす「可能性」は「ある」。日本語は論理的に曖昧なところが多く非常に特殊な言語である。漢字の源流である中国語はもともと論理的、概念的な名詞から言葉が発生したが日本語は動詞にそれを応用した。動詞は感情的であり個別的である。本来は共通概念にはなりにくいのであるがそれが島国。つまり狭い共同体、空気を読む、付度する。このような文化は言葉から生まれているのである。さて、この日本語の「可能性」の使い方は「期待」の裏返しである。『北朝鮮が核ミサイルを使うから、日本も核武装しなければならぬ』という論理につながる。まさしく今回の「国難解散」である。本来の表現は「蓋然性が高くなってきている」である。学校もマスコミもまったく感情的な国だ、日本は。

さて、なぜパスカルが確率という概念を思いついたのかの鍵は彼の「宗教」にある。パスカルの生きた一七世紀、キリスト教には二つの創造論があった。「神の創造は最初の一瞬で完結しており、その後の出来事は全て計画通りだ」というものと、「神は時々刻々と働き続けており、創造は今も続いている」という考え方である。両者の特徴を端的に表現すれば、前者は「静的創造論」、後者は「動的創造

論」と言える。デカルトやライプニッツは「静的創造論」の立場を取っており、ニュートンやパスカルは「動的創造論」の立場をとっていた。キリスト教信仰のなじみがない日本では、これらの偉大な科学者たちが神を信じていたということは意外であるが、そもそも現代科学はキリスト教が源流である。自然科学と宗教は対極的なものであるが、これが結びついたのがこのキリスト教である。さらになぜ自然科学が東洋でなく西欧で生まれたのかを話すると長くなるのでここでは省略するが、この時代の哲学者は科学者でもあり宗教の熱心な信仰者でもある。そのような科学者ニュートンとパスカルは、『デカルトはできることならば、神なしで済ませたかったに違いない』と、「静的創造論」を激しく攻撃した。ご存知デカルトも数学者である。最初の創造だけ神の力が必要で、その後の宇宙は機械仕掛けのごとく動いていくだけなら、悲惨な戦争も略奪も、全て神の計画なのか。これが愛なる神の否定でなくて何であらうか」と、「静的創造論」が無神論へつながる危険性を訴えた。対するデカルトやライプニッツは「おまえたちの言い分を聞いていると、まるで神は最初の創造の時に間違いを犯し、繰り返し繰り返し創造をやり直しているように聞こえる。これが神の全知全能性に対する冒瀆でなくて何であらうか」と、ニュートンとパスカルを非難した。さて、ニュートンの

仲間であったパスカルは、神の存在が信じるに値するものであることを「確率」で説明した。パスカルの確率論による信仰告白は、「パスカルの賭け」と呼ばれている。ここで「確率」概念を使って神の（世界の）「動的創造」を説明をしているのであるが数学の確率論は「期待値」や「確率変数」というものを知らないで理解できないので省略する。代わりに同じくパンセにある言葉を挙げておく。

神は存在するか、しないか。君はどちらに賭ける？いや、「どちらかを選べ」ということが間違っている。正しいのは賭けないことだ。だが賭けなければならない。君は船に乗り込んでいっているのだから。

要するに、自然や宇宙は人間の考え（思考）で動いているのではなく、同じ神の創造物である自然の一部として人間も常に変化しそれらに動かされると言っているのだ。

大きな回り道をしたが、ここで本論「死の哲学」に戻ろう。パスカルは「死」について、『人間は考える葦である』の断章で、「人間は自分が死ぬことを知っている、それゆえそれを知らない宇宙よりも偉大である」と言っている。「人間はか弱い一本の葦であるが、自分が死ぬことを知っている、だからそれを知らない宇宙よりも偉大である」とのように読める。読者の多くも断章から「考えことの重要性」↓「動物、自然、宇宙は考えていない馬

鹿さ」という「人間の尊大」を思い浮かべているだろう。しかし、このような「人間の傲慢さ」の証なら、この断章が四百年近くも全世界で読み次がれる訳がない。パスカルは「死」を考える人間とはいかなる存在かを深く考える人である。それを科学的に宗教的に文学的にそして哲学的に。

この傲慢な「考える人間は偉大である」ということこそがパスカルが非難したデカルト的思考「静的創造論」である。パスカルの「動的創造論」は理性の対極にある信仰は理屈によって云々すべきものではなく、己の存在をかけて、全身で受け止めるべきものであり、それは理屈では得られない。我々が神を感じ得るのは、ある種の飛躍によってなのだ。それを神の立場から言えば、神からの我々に対する啓示、すなわち自然は神の現れであるということになる。だから自然を知ることが神の意志を知ることになる。神に対するデカルトとパスカルのこの姿勢の違いは、人間の理性に対する確信の相違に由来するのだろうか。

デカルトにとって理性は万能であり、神の存在でさえ証明できるものであった。またそうして証明された神は、その本性において善良であり、人間を欺くはずがない。人間は理性を正しく行使することによって、神の光に照らされながら、確実に揺るぎのない生きかたを保証される。しかしパスカルにとっては、神は隠れた

もので、人間の理性では窺い知ることのできないものであった。つまり啓示（現れ）でしか知りえないものである。またその神は、デカルトにとっては欺くことのないものだったが、もしかしたら、そんな風に思い込んで人間を欺いているのかもしれない。パスカルがこういうことで主張しているのは、理性に対するデカルト的な礼賛への戒めであった。

パスカルにとって、理性と感性、証明と啓示とは全く異なった秩序に従うものである。だからそれらは本来別々の領分を持つていなければならない、デカルトは両者をごちゃ混ぜにしてしまった。このようにデカルトとパスカルは、人間の理性に対する信頼という点で、やや異なったスタンスを取っていたことがわかる。パスカルにとっては、理性は万能ではありえなかったのである。もう一度よくこの断章をよんで見るとわかる。『「宇宙の自分に対する優勢とを知っている」つまり、個々の人間の理性では無限の宇宙を認識できないし、何もできない。つまり無力だと言っている。理性は広大な宇宙を認識できないし（無力であり）思考はどんなに広大な宇宙であっても想像しうる。両方に矛盾はない。』

パスカルはパンセの別の断章でこう言う。『人間の偉大さは、その惨めさからさえ引き出されるほどに明白である。なぜなら、われわれは獣においては自然なことを、人間においては惨めさと呼ぶか

らである。そこで、われわれは、いま人間の本性が獣のそれと似ている以上、人間はかつては彼にとって固有なものであった善い本性から、堕ちたのであることを認めるのである。（四〇九）』すなわち人間は獣は「自分の死を知らない」ということを「惨め」と言うが、それは「もつと善い本性からの墮落」だと言う。つまり、動物は自分が死ぬことを知らないからそれに臨んでも悩んだりすることはない「善い本性」であると言うのである。やれ、延命治療やセラピーやと慌てふためく現代人にとっては耳の痛いことである。しかし、一旦「自分が死ぬこと」を知ってしまった人間はもう後に戻れない。ではどうすればよいのか。それもあの断章の最後にある「道徳の原理」に答えがある。このパスカルの「道徳」とは「理」を遵守する「覚悟」「確信」のことである。つまり、人間と自然は本来一体なのである。「死は終わり」でなく「常に動き変化する自然に還ることであるという」知であるというのだ。

さて、「科学」「哲学」「宗教」が「文学的」に語る「死とは」、感情的に納得いただいたであろうか。



大峯奥駈道(13)

梵店主

金峰神社の脇にある石畳の道を登るとすぐに細い山道になった。道は曲がりくねり傾斜がきつくなってきた。汗が出て息苦しくなつて少しばかり自分の予想と違っていると気づいた。私は、昨夜の夜行軍ぐらいいは平気だとうぬぼれていたが身体の疲れは溜まっていたのである。人間と云う奴は、本当に好き勝手に考えたがる、と自分の事を他人事のように自分を批判した。

高ちゃんも私も酒が好きだから、出発する前に私は高ちゃんに電話で聞いた。「酒はワイン二リットル一本でいいか」とすると「焼酎も飲みたい」と高ちゃんが言ったので焼酎を追加した。水も二リットル二本、洗った米など思い切り詰め込んだ。大きなザックがパンパンに膨れ上がるほどに入れてきたのである。私の心の奥底には自分の体力は回復して強くなったという過信があった。

一時間ばかり歩くと小雨が降りだしてきた。天気図では二つ玉低気圧が来ていて天気が荒れそうだったが、北アルプスではないから大したことはないだろうと思っていた。汗をかいて暑いので少しの雨は気にならなかったのだが、二時間ほど歩いて標高が上がってきたためか、小雨が小雪になった。雨より雪の方がましだ

と思ひながらひたすら登つてゆく。

吉野から山上ヶ岳までは、いくつもの山を越えては下りしながら登らなければいけない。せつかく苦勞して登つてきたのに、また下る。そして、すぐにまた登る。元氣なうちは、まだいいが疲れてくると嫌になつてくる。そこで考えるのが巻き道である。

大きな山には巻き道がある場合が多い。山頂を登らず山麓を迂回するルートである。本なら山頂通しの縦走がいいのだけれど、体力が落ちてくればやむをえない。

四時間ばかり歩いて百丁小屋まで来た。小さな避難小屋があった。その小屋の前でしばらく休憩した。そこから先には大天井ヶ岳がある。急で長そうな稜線である。私は、大分疲れていたもので、高ちゃんに「巻き道を行こう、この登りはキツイわ」と「ああ、いいですよ」と彼も承諾してくれたので一安心した。

高ちゃんは、まだ疲れた様子はない。大きなザックを担いで安定した歩きである。体格も大きくガツシリしている。彼は、済州島生れ済州島育ちで韓国の徴兵制度のために二年余り海兵隊にいた。軍隊の中でも一番きびしい隊である。彼の話を聞いたたびに、日本に徴兵制度がないことに感謝した。徴兵制度はほんとうにつらくて苦しい制度である。

彼は、あまり軍隊の事は話らないが、私が執拗に聞くので仕方なく話してくれ

る。韓国の海兵隊の実情を聞くとやりきれなくなる。

一番つらいのは、厳しい訓練よりもバカな上官のイジメであつた。いろんなイジメがあつたが、寝てから起こされての体罰はひどかつた。これを毎晩やられたらもう氣が狂いそうになつたという。上官の憂さ晴らしのためのイジメが横行していたという。日本でも同じような事が過去もあつたし、今もあるのだろう。軍隊の中は密室であるから、告発をすることも容易ではない。何が行われても耐えるしかないのが軍隊の実情だ。しかし、バカな上官はどこにでもいる。どうしようもない奴の部下になればたまつたものではない。

山岳部も嫌な上級生がいて困ることもあるが部を辞めればすむが、軍隊は辞められない。

大天井ヶ岳の斜面を横切るように細い踏み跡があつた。在来道ではあるが巻き道である。トラバースともいう、登り下りが少なく楽なようにつけられている。山の急な斜面につけられているので積雪期やがけ崩れの時以外は使えるように整備されている。

しかし、その道は急な斜面に細く付けられていた。間違つて滑つて転んでもしたら、止まるような斜面ではない。木々もまばらな斜面は下まで続いていた。慎重に歩かなければ、命がいくらあつても足りない。

連載「おつちよこチヨイぼけ」(54)

——昭和女、どっこい日記——

母とバチあたりなワタシ…の巻

こんなことを書けば多分、バチがあたる。母親に関して、私ほど恵まれた境遇の人間はそう多くない、と思つている。なのに、書きたい。母の悪口！

私の母、九十一歳。百歳で助産師をしてるとか、美容師として働いてるとかいふ人たちほどのパワーはもとよりないが、独りできちんと暮らし、ヘルパーさんなどのお世話になることもなく、三度の食事を自分でつくり、たまに近所のバーサン仲間たちとお喋り会を開き、「老人会」の寄り合いがあれば、嬉々として出かけて行く。

夫(私の父)は五十九歳で他界し、子供は三人。母の家の近所に、末っ子で長男の弟一家が住み、少し離れたところに長女(姉)がダンナと暮らしている。姉の一人息子は結婚し、別の場所で所帯を持つているから、姉はほぼ毎日、散歩がてら母の家に行き、夕ご飯の足になるような惣菜あるいは果物などを買って届けてくれている。

弟は毎日、会社の帰りに母の家に寄つて、夕ご飯は食べないが(ヨメがつくつて待つている。いや、もはや待つてはいないかもしれないが。とにかく、夕ご飯

は、弟は弟の家で食べる)、母が用意した果物だけササッと口に入れて、自分の家に帰つて行く。母の安否確認というミッションを弟は背負つてくれているのだが、もうひとつ、弟の家のガレージは車一台しか止められないという事情もある。弟は会社の車で往復しているの、会社の車は母の家に置いている。つまり、朝、母の家に寄つて会社に行き、夜、母の家に一旦帰つて、会社の車を置いて…というのが弟のガレージ代節約生活なのだ。(ありがたい！)

車のほか、弟は独り暮らしとなつた母の家を物置として活用。スキーやキャンプ道具などから季節外の衣類まで母の家の二階やベランダに預け、ついでに「クーリーニングも出しといてな」と気軽に頼んでいる。

このほか、子供たちが夜店で釣つてきた金魚も母の家で暮らし(これも十数年という長生きで、バカでかくなつた。さすがに、一匹減り、二匹減りしていったが、それでも残つた金魚は大人の手のひらぐらいの大きさに育ち、色も赤の部分がないで抜けて白く神々しい金魚様になつてゐる)、日曜日になると、弟が水槽の水を換えたりして、母との交流を深めている。

金魚より何より、母との交流で大きな役割を果たしてくれているのが弟の二人

の息子、母の内孫たちだ。生まれつき優しい子供たちなのだが、弟の誘導が「うまい」。「今日は、ばあちゃんに、焼き肉をおごってもらおう」「ばあちゃんの買物に行くから、お前らもついて来い」。

眼の中に入れても痛くない長男の息子たちである。週末、母は、大して膨らんでもいない財布（年金暮らしで膨らむわけがない）を手提げ袋に入れて、いそいそと弟の家のワゴン車に乗り込む（嫁の方にもお父さん、お母さんがいるので、六人は乗れないと、ということで弟が無理して買った車だ）。

弟は、末っ子の強みなのか何なのか、私たち姉二人には考えられないようなおねだりを平気でする。「お母さん、オレ、給料日前やねん。二人に小遣い、やってくれる？　〇〇を買うたつてくれる？」。買物ついでのランチ代、母の買物のためにガソリンを使わせているからと、ちょっとしたモノのレジは母の財布から。母はそれらが嬉しくてたまらない。とくに孫二人がちょっと照れくさそうに言う「ばあちゃん、ありがとおつ」のひとつとは母を若返らせてくれる特効薬だ。そんな母の二番目の娘であるというのは、奇跡のように有難いことだと思わなければいけない。母の近くに姉と弟が住んでいて、目いっぱい母に関わっているから、私は呑気に仕事をしていた。

れる。だから文句言ったら、絶対、バチがあたる。わかっているのだけど、書きたい。

ついこの間のことだ。母と電話でしゃべっていたら、「いや、アンタに心配かけたくないんだけど、洗濯機が壊れちゃってね」と言う。こういうとき、働く次女はピンとくる。心配しなくてはいけないのだな、と。「そら、すぐに関わんとアカンね」、「調べたら（母は何でもきちんと帳面に付けている）、十三年前に『子供たち一同より』ってアンタたちからプレゼントしてもらった洗濯機やった。壊れるのがちよつと早い気もしたけど、もう十三年も経ってたんやと思って」。

「子供たち一同より」と書いたのは私だ。お金を出したのは私一人だが、

三人からの方が、母が喜ぶと思ったのだ。多分、そのころ姉は義兄の転勤で大阪におらず、弟は殿様性格なので、「あ、そう」（僕はお金出さんでいいんやね）で終わっていたと思う。

まあしかし、大物家電が壊れたら、私も友だちに「ウチのクーラーが壊れてしもて」などと愚痴るので、母もそれかなと思ったが、母は確信犯だった。

私は、いくらぐらいの洗濯機を買うつもり？と聞き、相応額（五万円）を包んで母の家に飛んで行って渡した、と思っていた。母は一応、「まあ、よかつたのにい。お母さん、それぐらいのお金はあるのにい」と遠慮しつつ、こう言ったのだ。「洗濯機が壊れたことは、姉ちゃん（私の姉です）には言うてないのよ。あの子のうちは年金暮らしやから」。そうなんやね…。

翌日、母は弟の車で、家電量販店へ、洗濯機を買いに行った。こういうときに母が頼りにするのは嫁だ。「お義母さん、こつちにパナソニックが。（台湾に身売した）シャープより、ええんちやいます？」とすすめてくれて、母はそれを買った、と電話で報告してくれた。「S美さん（嫁）ってしつかりしてるから。おかげで、安くいいのが買えてね、三万七千五百八十四円だった」とホクホク。「だからね、マサヤに加湿器をね。どうしようかなあって、あの子、すぐく迷っていたから。私、お金をアンタにもらっていたから、『ばあちゃんが出すから買いなさい』って言うてあげたら、喜んでね」。

お釣りをもらうつもりはなかったし、母が嬉しそうだったからいいのだけど、マサヤの加湿器なんか、私は買う気はなかったぞ。そもそも、何で十八歳の若者が加湿器を欲しがるのだ、「チャラ男」もいいかげんにせい。

しかし、力なく私は言うだけだ。「よかつたね…マ…君も」。

さらに、母は新しいことを言い出した。

静岡にいる母の妹が、母に会いたいと言っている。叔母の希望は、静岡から家出することのようだが、母は中間の三重県にある「なばなの里」で落ち合せて、前に泊まったことがあるホテル（「花水木」だったか）に泊まれば、妹の気も晴れるのではないかと。そして、私に「アンタ、一緒に行ける？」と聞いてきた。「別にいいけど」と口ごもる私に、母は「○子（私のこと）も連れて行っている？　つて聞いたら、『いいよう。でも○子ちゃんがホテル代を払うつて言うから、それが困るに（静岡弁）』つて言ってた（笑）」。

私の都合を聞くより先に、叔母さんに言っちゃっているし。

叔母さんは若い時からよく働いて、小金持ちなので、私の出すホテル代など、これっぽっちもアテにしていけないが、たまには叔母孝行してみようと、以前、宿泊代を私が出したことがあった。それを叔母の言葉で思い出したが、母よ、私と弟の待遇の差って大きくないですかね？　母と旅行はしたいし、老い先短い母を喜ばせることができる、というだけでもありがたいことで、ケチケチしたら後で一生後悔する、と自分でも思うが、この話の続きで、母の言った一言は解せぬ。「アンタも、ちゃんと貯金しときなさいよ」

大人の今昔物語 (39)

石川 吾郎

今回はある男の愛の顛末。現代ならばさしずめストーリーカー誘拐事件といえそうです。教科書に出ない度は三／五。

大納言の娘、内舎人^{うちねり}に取られる話し (巻第三十 第八話)

今は昔、さる天皇の御代に、大納言・某という人がいた。子どもが数多くいる内、姿美しく、気だてもやさしい娘が一人いた。父の大納言はこの娘を非常に可愛がり、ひとときも傍らから放さず慈しみ育て、行く末には天皇に差し上げようとも思っていた。その家に侍として使われている内舎人の某という者がいた。この者はさる縁故があり、その家に奥まで立ち入ることが許されていたが、ふとした成り行きでこの姫君の姿を見てしまった。

その姿かたち、立ち居振る舞い、たぐいまれな高貴さで、男はたちまちこの姫君に恋をしてしまった。身分があまりに不相応なので、思いを掛けることなど思いも寄らぬことだが、夢中になって前後の判断もつかず、夜となく昼となくただこの姫君を思い焦がれ、逢うことばかりを思い詰め、恋の病いにとりつかれた。食事ものどに通らず、死ぬほどにもなってきた。思い悩んだあげく、この姫君にお仕えする女に会って次のように言った。

「重大事を殿に申し上げることがありますが、まず姫様に申し上げようと思っておりますので、そのことを申し上げてください」と頼む。女「どのように申し上げますか」と言うので、男「この事は極秘のことですので、人を介しては申し上げられませぬ。長年殿さまにお仕えして、出入りを許されておるこの身。恐れ多いことながら、姫さまに縁先にお立ちいたさしましたら、この私めから直接事細かにお話し申し上げます」と言う。女はこれを聞き、姫君にひそかにそれをお伝えすると、姫は「何事でしょうか。ほんにこの者は親しく仕えてきた者ですので、遠慮はいりません。私が直接聞くことにいたしましょう」と答える。女からこれを伝えられると、男の心は躍った。「姫君なしではもうこの世に生きていけるとは思えないので、同じ死ぬなら、姫をさらって思いを遂げ、その後身を投げて死んでもいい」と思い定めたのだった。

そんなわけでこの男、もう自分の命も長くないと感じ、万事に心細く不安が襲ってきたが、この恋心はどうしても止めることができず、頼んだ女房に会って「例の事はどうになりました」と急かす。女はこのことを姫君にお伝えすると、姫は何の疑問もなく、縁の端に出てきて、板戸のある簾の内側で立つて聞こうとした。夜であつたので回りに人はいない。男は縁に近寄り、これといって話す内容もないのでしばらくじっとすわっていた

が、「大それたことを実行してしまうのか。やつてしまえば自分はもう終わりだ」と、思い悩み逡巡したが、ただ姫に対する思いが、沸々と我が身を焼け焦がすばかりに思える。「ええい、死のう」と決めて、さつと走りだして簾の中に飛び込み、姫を抱えて素早く屋敷から連れ去り、人気もない所まで逃れる。

残された屋敷では「姫様が見えなくなつた」と大騒ぎになつた。大納言以下、一家総出で搜索をする。しかし見当もつかずすべて徒労に帰した。この内舎人が同じ夜から姿を見せず行方不明になつたことは明かになつたが、この内舎人が誘拐したとは想像もせず「どなたか高貴なお方に誘われたのではないか」などと使用人たちは疑つて語りあつていた。また例の仲介をした女は、確かに内舎人が姫を抱えて逃げ去つたのをその目で目撃したのだったが、それが露見するのを恐れて言い出せずに、ただ周囲と話を合わせているだけで終わってしまった。

さてこの内舎人は、「このことが知れたなら、自分の身も終わりになる。このまま京には居られない。ただただ遠方に逃げ、野の中、山の中にでも、姫さまを連れて共に暮らそう」と決めて、この姫を馬に乗せ自分も馬に乗り、弓矢を背負い、関東方面に逃れた。親しく使っている従者二名だけを供にした。夜となく昼となく進んで、陸奥の国の安積の郡(福島県)の安積という山の中に行き着いて、「ここ

はめつたなことで追つ手は来ないだろう」と判断をして、そこに木を切り出して庵を立てこの姫を住まわせ、内舎人は従者を連れて里まで出て、食物を調達して姫を養つた。

こうして月日が経つた。夫が里に出たあと姫はただ一人その庵に留守居をした。そうするうちに女は妊娠をした。男は例によつて食糧を求めて里に出たが、四五日帰つてこなかつたので、女は待ちわびて心細く、庵を出て周囲を見て歩いた。山の北に泉があるのを見つけ、自分の影が水に映るのを見た。鏡など見ることも長らくなかつたので、自分の姿がどうなっているのかも知らずにいたが、水面に映る自分の姿を見ると、その姿が変わり果てているに、驚き恥ずかし、次の歌を独り言のように詠んだ。

あさか山かげさえみゆる山の井の

あさくは人をおもふものかは

安積山の姿までが映っているけれど、私はあの人を浅く思っているのではない、深く愛しているのです

これをそばの木に書き付けて、庵に帰り、かつて実家に暮らしていたとき、父母はじめ多くの人々にかしずかれ、何不自由なく暮らしたころを思い出すと、際限なく心細くなる。「前世のどんな報いなのだろう」と思うと、耐え難くなつたのだらう、そのまま思い詰めて、死んでしまった。

B級サラリーマン渡世譚 (52)

明石 幸次郎

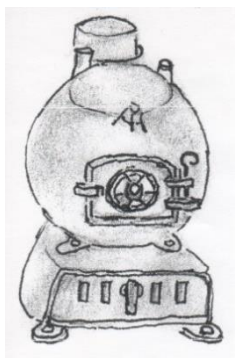
その後、この男が食糧を従者に持たせて戻ってくると、女が伏せて死んでいる。それを見て嘆き悲しんだが、山の井の脇の木に、例の歌が書き付けてあるのを見つけて、悲しみはさらに増し、庵に帰って死んだ妻の傍らに添い寝をするように、この男も思い死にに死んだのだった。

この話しは、従者が語り伝えたのだらう。世に伝わる物語に伝わっている。こんな訳で、女はたとえ従者であっても男には、心を許してはいけな、と語り伝えられていることだ。

《コメント》

身分の違う激しい恋心の物語。男が一方的に恋をして、姫を拉致していく点は、現代ならばさながらストーカー犯罪ということですが、その後共に住んで、姫の方も男を「深く愛している」状態になった、という点で純愛物語になって、救われる気のする話しです。

最後の話者のコメントは、相変わらず常識的なおとぼけぶりです。



明石は、K村から言われたように、H川の席まで出向き、丁重に挨拶して、一杯に酒を酌み交わして、韓国の情報で参考になることは、何でも聞き出そうとした。結局は韓国流の酒の注ぎ方、飲み方を伝授され、宴席が大事だと言われただけで、それ以外は教えてくれなかった。考えてみるに、そのことで、H川を責めることは出来ない。初対面の人に自分が持つている情報は、普通は喋ってくれないものである。自分の甘さが嫌になったが、何よりも、酒が飲めない人間は、韓国では仕事が出来ないとまで言われてしまったのは、鈍感な明石も、流石にショックを受けた。

無理をして限度を超えるまで飲んだが、もつと飲めと言われ、これ以上飲まされると、酩酊してしまいそうなので、断ったのがH川を怒らせて、絡まれてしまった。酒飲みと付き合うのは難しいものだと、改めて思った。

丁度その時に、幹事のN川が、立って大きな声でもうすぐ宴が開きになるので、元の席に戻るよう促した。そのお蔭で明石は、H川から解放されて、元の席に戻って来れた。

N川が宴の最後の締として、輸出第二

部の売り上げ拡大と新しく仲間になったメンバーの今後の活躍を祈念して一本締をするので、起立して御手合わせを願いますと、座って居る皆に立つように促した。N川の「よう」という声を合図に、しゃんしゃんしゃんの手拍子で一本締めは、あっさり終わり、歓迎会はお開きとなった。

明石は、宇都宮からの移動の疲れと、H川に飲まされたアルコールが効いて来た為か、立つと身体がフラフラして来た。周りの人に歓迎会のお礼の挨拶をしたので、少し休んでから、店を出ようと思いい、皆がさーと潮が引く様に宴会場を出た後も、元居た処で座って水を飲んでいた。そこに、店のおかみさんがかたづけに来て「あら、明石さん、何してんの。皆が二次会に行くと言って出て行ったよ！まあ、途中から参加したから、ピッチを上げて大分飲まされたんやね。まあまあ、暫く休憩しときなはれ」と言われた。「明石さん、まだ、ビールが沢山残ってるわ！もったいないから、飲んでよー。ハイハイ」と、そのらのコップに勝手に注いで、手に渡された。

「ほんで、本社に戻って来たんやから、ウチの店に精々通って貰わないとアカンよー。明石さんも偉なりはって、輸出部に来たから、これから外国にドンドン出かけるんやね。外人さんも来るんや

ろ？息子も一生懸命やっているので、このフランス料理屋を頼まっせー。あの、英語で何たらレストランというやろ」「あー、フレンチレストランやね」「あんさん、やっぱり輸出部のお方は直ぐに英語が出て来るんやね？それにしても、しんどそうやね？お茶持って来ようか？」

「頼みますわ！温かいお茶！」と言った時に、幹事のN川が勘定を済ませて誰か忘れ物をしていないかの確認の為に宴会場に戻って来て、「明石さん、何してるのですか？二次会に行きましよう！もう、先に何人か行ってますよ！」

「えーまだ、二次会があるの？ゴメン！今日は、この通り、H川さんに大分飲まされ、その上に絡まれたので疲れた。遠慮させてもらうわ」と言ったら、「H川さんね。あの人、普段はニコニコして大人しんですけど、飲んで、一定の量を越えたら、人が変わったみたいになられます。皆は良く分かっていますから、宴会の後半になると、H川さんに近づかないようにしています。申し訳ありませんでしたね、H川さんの席に行かれる前に、気を付けられるように言った方が良かったですね。K村さんは、何も言わなかったのですかー。まあ、忘れ物が無いようなので、店を出ましようか？」とN川が、急いでいる様子であったので、明石も立ち上がり、靴を履いて出口に向かった。

入った。

A 杉課長は「朝一番にすまんが、明石、昨日の宇都宮工場での打ち合わせはどうやった？結論だけ教えてくれ！」と単刀直入に質問された。

明石は「七月末の船積みには間に合うように工場とは確約を取り付けました。コンテナ船も M 商事の乙仲の日本倉庫が予約完了したそうです。工場からの出荷日程の実務的な打ち合わせは、今日から開始します。ただ、工場からは、今日中に仮価格の製作依頼書を出す様に言われています」と要点だけ答えた。

「そうか、管理課長が何か言ってたか？」と意外な質問をしたので、「ああ、Y 口さんですか？挨拶に行ったら、ニコニコして、値上げしてねーと言われましたが、工場長の方が、シビアな言い方をされました」と言うと、「M ちゃん、価格交渉は、M 商事とどこまで詰めていたんや？」と M 居に投げかけた

M 居は「I 川さんとは、去年比五パーセント UP までは、了解したと話は付けてますが、五月に韓国に行った時は、D 工業には七パーセントの値上げを申し入れました」

「分かった。それは、宇都宮工場には、言ってるのか？」「H 工務課長には、この前、言いました」「何ぼ位で言ったんや？」「五パーセントです」「そんなん、

満額回答やなあ？少ない目に三パーセントで言うといたら良かったのに。注文書は仮でもエエから M 商事から取ったんか？」

「それは昨日、東京で打ち合わせして、今日、昨年比五パーセントアップの正式注文書を送って貰う事としました」と M 居は答えた。

それに対し、「M ちゃん、バングラの商売との絡みがあるので、韓国の口銭から、バングラに回さなアカンのと違うのか？アンタの考えもそうと違うのか？それを工場に 5 パーセントと言うてしまうと韓国がアンタが申し入れた七パーセント UP を飲んでくれたら、その差額から回せるが、飲んでくれへんかったら、どうなんねん？バングラは捨てるのか？」と M 居の考えを質すと、「まあ、私は途中で韓国は首になりましたので、これからの交渉は、担当の明石にやって貰い、その為に、出張させようという事ではないのですか？」と意外な方向で明石にお鉢が回って来そうな雰囲気になった。



オクラの山たより (14)

困生

今回は「枕草子」の中でも、とりわけ読者をアツと言わせる章段を紹介しようと思う。定子に仕えていた女房たちの中には三十歳を超えた清少納言のような年配者だけではなく若い女房たちもかなりいたはずである。そうした若い女性たちがどこぞへピクニックにでも出かけたようなハシヤギぶりが伝わってくる章段である。この章段はあの硬骨漢の実資の「小右記」にも記載があり、日時も分かっている。

長徳元年（九九五）七月四日夕刻のことである。先の閑白であった藤原道隆が亡くなって三ヶ月も経たないときのこと。内裏の東南辺りでちよつとした騒ぎがあった。「小右記」によれば次の通り。最初の七月五日は日記の書かれた日付。

七月五日。中宮の女房、昨日陰陽寮の楼に登る。又、侍従所に向かひ巡見す、四位少将明理直衣烏帽子にて陪従す、左衛門の陣官らこれを見て、奇とす。

「中宮の女房」とは言うまでもなく中宮定子に仕えていた女房たち。「陰陽寮」は南に正門があり、中に入ると正面に政庁、奥に「漏刻」と呼ばれた大きな水時計があり、その東に楼閣があった。漏刻で時間を計測し定刻になるとここで太鼓や鐘を鳴らして大内裏中に時間を知らせたのである。漏刻の高さは不明である。埼玉

県の川越市に現存し江戸時代以来ずっと住民に時を知らせてきた鐘楼は高さが十六メートルあるそうだから、この陰陽楼の楼閣もかなりの高さがあつたのではないか。この楼閣に中宮の女房たちが登つたのである。しかも女房たちは侍従所の辺りまで押しかけて大騒ぎをした。後で述べるが「枕草子」によれば左衛門の陣（左衛門府詰所）では役人の制止するのにも無視して部屋の中にある椅子を壊すという狼藉を働いたという。侍従所とは南所ともいい中宮定子のいた職御曹司しきのみせうしの外記庁げきちょうの南にあつた施設で登庁してきた人の待機場場のような所（時には宴会場にもなつた）であつた。また、左衛門の陣は職御曹司のすぐ西、建春門から内裏に入つたすぐのところにあつた。

この「小右記」の記事でもしろいのは、ドヤドヤと走り回つて狼藉を働いた女房たちよりも、内裏の間近という公的な場所なのに明理が直衣烏帽子姿ちしえくまぼうしという私服だつたことの方が陣の役人の顰蹙ひしやくを買つたらしいという点である。明理とは源明理のこと、伊周の岳父である源重光の息子なので、伊周とは義理の兄弟となる。

この一件を清少納言は「枕草子」第一五六段「故殿の御服のころ」でかなり詳しく書いている。「故殿」とはこの年の四月に亡くなつた前関白道隆のこと。父親の死とあつて服喪中の中宮定子は六月三

十日に行われる大祓おほはつえという神事を遠慮して、六月中旬から七月八日まで内裏を出なくてはならなくなつた。このときの出御先は太政官朝所だいじょうかんあいたんじょうという役所である。そこは住居用ではなく役所のオフィスとして建てられた建物で唐風な瓦葺で格子の戸もなく、四周に御簾をめぐらせただけという少し変わった造り。住み慣れた檜皮葺の寝殿造りに比べ、暑さが籠つて暑い耐えがたい上にムカデが落ちてきたりハチの巣の大きなのがあつたりとなかなか大変な仮住まいであつたらしい。

女房たちは「暑さの世に知らねば、御簾の外にぞ、夜も出で来て、臥したる」とあるから、「この暑さはたまんないはねえ」と御簾の外で寝たらしいのである。いくら耐えきれない京都の酷暑とはいえ、この時代で一定の身分ある女性（女房たちの実家は五位か四位のれつきとした貴族）が御簾の外で寝るといふのは、保守的な人間でなくとも「えッええッ」と目を見張つたことだろう。

女房たちの奔放な行動はこれだけではない。「朝所の唐風の建物をおもしろがつて」女房、庭におりなどして遊ぶ」ことまでした。

さらに女房たちは朝所から飛び出して、向かいに立っている陰陽寮の鐘楼にまで登るといふことをしかした。

若き人々二十人ばかりそなたに行き、て、階はしより高き屋にのぼりたるを、こ

れを見あぐれば、ある限り薄鈍うすにびの裳も唐衣からぎぬ、同じ色の単襲ひとえがさね、紅くれなゐの袴はかまをも着てのぼりたる

というのである。今さらいうまでもないだろうが、これは平安時代の女房の話であつて、パンツスーツを着た現代のキャリアウーマンのことではない。十二単といわれる、あの大仰な装束を身につけて、つまり、長い袴をはき、幾重もの着物の裾と、さらに長い裳の裾をひいて高い所へと登つて行くことは並大抵の大変さではなかつたろう。比較する素材としてはまずいかもしれぬが歌舞伎の「八百屋お七」のクライマックスでは、恋に悩乱するお七が火の見櫓に登つていく場面がある。華麗な衣裳の裾や袂、だらり帯などが扱いにくそうにして足下がおぼつかないまま登つていく女形役者は見る者をハラハラさせるが、それでも江戸時代の女性髪も結い上げていた。その分だけ活動しやすかつたはず。平安時代の女房たちはかさばる衣裳の上に長く垂らした髪が加つたのである。まったくどうやって登つたんだろうかと想像しかねるほどである。しかも若い女房二十人である。おそらく二十歳前後の女性たちがキャリアと騒ぎながら登つていったのだろうが、清少納言はどうしていたのだろうか。先ほどの記述の後にこう書かれてい

る。同じ若きなれど、おしあげたる人はえまじらで、うらやましげに見上げたる

も、いとをかし

気の毒なことだが、同じような若い人でも、登るのを手伝つた人は楼の上が狭いので一緒になれず、うらやましうに見上げていたのである。「いとをかし」といっているところを見ると清少納言もその場にいたと想像される。たぶん三十歳を少しばかり越えていたであつたらう彼女はずがに十歳以上も若い女房たちと楼に登るといった大胆なことはしなかつたのである。

さらに一部の女房たちはさらにもつと先まで行つて一段と大胆にハシヤギ回つた。左衛門の陣まで行きて、倒れ騒ぎたるもあめりしを、「かくはせぬことなり。上達部かんだちめの着きたまふ椅子いし（公卿のすわる椅子のこと）などに女房どものぼり、上官などの居る床子そうじ（机状の椅子のこと。腕木はない）どもを皆打ち倒しそなひたり」など、くすがる者どもあれど、聞きも入れず。

（「左衛門の陣まで行つて大騒ぎした人もあつたようだが、『これはまた無茶な。上達部の人々が御着席になる椅子などに女房たちがのぼり、太政官の偉いさんが腰掛ける床子をすつかり打ち倒して壊してしまつた。』などとくそまじめに言い立てる者がいるが、女房たちは問題にもしない。」）

彼女たちの大胆な行為はまず陰陽寮からさらに真北にある左衛門の陣（建春門にあつた役人の詰所）まで、二百メートルほどワイワイと歩いて行つたということ

である。御簾越し・几帳越しですら男性に
対面するのを嫌うというのが、この時
代の女性の常識的な反応であるのに、誰
かと行き会うかもしれない外の道を、顔
を隠す物といえは扇くらいしか持たぬ状
態で、牛車にも乗らず徒歩で出かけたの
である。驚天動地とはこのことであろう。
女房たちの大胆な振る舞いはこれだけ
ではない。さらに左衛門の陣では椅子にの
ぼり役人のすわる床子（椅子のこと）を
すつかり倒して壊すといったとんでもな
いことをやっている。

この女房の行為に対して清少納言はどう
していたか。おそらくは朝所あたりから
「ああ、やってる、やってる。」と見てい
たことだろう。「これはまた無茶な……」
とっているのは太政官の居残り当番の
者。なにしろ相手は中宮付きの女房たち
である。地位の低い彼らにとつてみれば、
注意はするものの、どうやって彼女たち
の狼藉を止めたものか困りはてたことだ
ろう。

定子中宮に仕える女房たちの大胆な行
動そのものも相当なものであるが、その
行動だけでなく、その服装にも驚かされ
る。彼女たちはみな鈍色（黒灰色）の裳
をつけていた。これは故関白道隆の葬に
服しているとき姿である。いやでも見る
人々に故関白が亡くなって間もないこと
を認識させてしまう。そこから考えると
女房たちの振る舞いは宮中の人々の話題
をさらうためのデモンストレーションで

あったとする見方ができないこともない。
女房たちの行動は、その日のうちに検非
違使の別当（長官）であった藤原実資の
耳にも届いていたのであるから、その目
的は十分に達せられたこととなる。

実をいえば第一五六段「故殿の御服のこ
ろ」は文庫本で六ページになるという「枕
草子」ではわりと長い方となる章段であ
る。定子中宮付きの女房たちがしでかし
たとんでもない行動という話だけでは完
結していない。この長い章段のおおよそ
の内容は次の通り。

① 中宮の御所となった朝所のようす。
陰陽寮、左衛門陣への女房たちの遠征
のこと。その朝所に殿上人たちも多く
やって来て太政官の地が「夜行の庭（夜
遊びの場）」となっていたこと。

② 朝所で過ごした最後の日である七
夕の日（七月七日）にやってきた斉信
と白居易の漢詩についての応酬したこ
と。斉信は本文では「宰相の中将」と
あるが作者の記憶違いで宰相（＝参議
の唐名）となったのは翌年のことであ
る。
③ 斉信との応酬の説明。同じ年の四
月一日ころに登花殿の細殿で起きたこ
と。

④ 作者と風流人斉信との交遊し、男
女の交情に囲碁用語を隠語に使ったこ
と。少し気の利かない右中将の宣方（左
大臣源重信の子）とのこと。

⑤ 文選の漢詩をめぐって斉信と宣方
とのこと。中国の故事をめぐって宣方
の間抜けな対応の話。

この要約をみてもわかるように記述の分
量としては女房たちによる遠征の部分は
章段全体の二割弱である。定子中宮が太
政官の朝所におられたときの回想から始
まり、七月四日の出来事、そして七月七
日の七夕での斉信とのやりとりが書かれ
その斉信との応酬との思い出からさらな
る回想とつらなり、宣方を比較の材料に
して斉信の間接的な賞讃となつて終わっ
ている。

「回想的な内容の随筆なんだから」とい
つてしまえばそれまでであるが、女房た
ちの遠征が何のために書かれたのか筆者
には今一つピンとこない。日記風な趣き
で書き出された女房たちの行動は殿上人
たちを魅了した明るく型破りな定子のサ
ロンのイメージにピッタリとした内容だ
が、それをさつとベールで覆い隠すよう
に斉信のすばらしさを記述する内容に変
えてしまう。このあたりの作者の呼吸が
筆者にはよく分からないのである。

想像をたくましくすれば次のようなこ
とも言えなくはない。

この回想的な章段といえる「故殿の御
服のころ」が書かれたのは池田亀鑑の研
究によれば定子が亡くなって数年後のこ
とである。すでに道長の権勢は揺るぎな
いものとなっていたが、一条天皇の第一
皇子である敦康親王をはじめとして定子

が残した三人の子どもたちがまだ生きて
いた頃である。権力の頂点に立つカギを
握る敦康親王を天皇に即位させようとす
る動きが中関白家の周囲の人々にはまだ
あった。この動きは寛弘八年（一〇〇八）、
道長の娘である彰子が生んだ第二皇子の
敦成親王が立太子するまで続き、道長・
彰子・敦成親王を呪詛して殺そうとした
事件さえもあったのである。当然、道長
や道長派に属する人々が中関白家に注が
れる目には厳しいものがあつたに違いな
い。「枕草子」の章段の中の回想的なもの
とか日記的なもののいくつかはこうした時
期に書かれたものだということは注意す
る必要がある。うっかりとしたことを書
けば自分の作品だけでなく、定子の子ど
もたちや関係者にまで累が及ぶかもしれ
ぬ。つまり、「枕草子」は単に文学的な装
いを付けているだけではなく政治的な配
慮をしっかりと上で書かれた作品だ、
ということを忘れてはならないのである。
こうした見方にたつてみると「枕草子」
の謎が少し解明できそうである。

「枕草子」の謎とは「出産」、「死」、「道
長の嫌がらせ」といった定子のまわりで
起きた暗い出来事がまったく作品中で触
れられていないということである。清少
納言が定子に仕えている間に「出産」は
三回あった。しかし、その出産前後のよ
うすを記述した章段は「枕草子」のどこ
にもない。歴史物語である「栄花物語」
では定子皇后の崩御前後の様子をかなり

詳細に書いているのにも関わらずである。しかし、考えてみれば「枕草子」の中で定子の死に触れば亡くなった定子への同情の念を読む人に沸き起こすこととなり、出産に触れると定子の残した子どもたちの存在がクローズアップされる。いずれも権力のトップに立つ藤原道長にとつては好ましくあらぬことであり、必ず目を付けられて圧力をかけられる。このことを案じて清少納言は「枕草子」という作品と定子の遺児たちを守るために避けたのではないか。

これといった確証もあるわけではないが、素人の筆者としては今はこう考えるほかはない。

そして、清少納言がこうした政治的な配慮をせざるをえなかったのは、執拗に続いた「道長の嫌がらせ」である。「道長の嫌がらせ」で最も有名な事件は定子が第二子の出産のために平生昌邸に遷御したときに起きた。その時の定子はまがりなりにも中宮であり、その遷御は公式の行啓（皇后や皇太子が出かけること。ぎょうけい）天皇の場合は行幸という）であった。公卿の中から行啓をつつがなく進行する上卿（儀式などを指揮する人）を選ばなくてはならない。だが、当日まで誰もやろうという者がいなかったのである。それは道長のさしがねであった。道長は行啓の当日に宇治の別荘に一泊の遊覧旅行を決定し、公卿たちを誘ったのである。目的は定子の行啓の妨害にほかならない。

道長とともに宇治に行ったのは定子のサロンの常連であり清少納言にもしつこく言い寄った藤原斉信。そして道長の弟である藤原道綱などであった。しかし、道長の誘いにも関わらず宇治に同行した公卿たちは決して多くはなかった。公卿たちのほとんどは都にとどまっていたのである。かといって道長を恐れて行啓の上卿をつとめるわけでもなく、じつとなり目をひそめて様子をうかがっていた。「日和見」である。

結局、困り抜いた一条天皇に対して恩を売るチャンスとみて上卿を勤めたのは権中納言の藤原時光であった。以上のことは「枕草子」の日記的な章段を清少納言が執筆しようとする時には誰もが知っている事実であったはずである。だが、こうしたことは「枕草子」には一言も書かれてはいない。また、道長に対する直接的な恨み言もない。道隆の死後、早々と中関白家を見限って道長に走り、実資から「親昵（いやらしいほどにべたべたしている）」とか「恪勤の上達部（道長の従僕であるかのように勤務に励む最高位の貴族たち）」と書かれるほど道長べつたりとなった斉信もそうである。斉信は「枕草子」に頻繁に登場するのだが、「枕草子」のどこを捜しても彼に対する褒め言葉はあっても非難するような言葉はない。やはり、これも定子の残した子どもたち守り「枕草子」という作品を後世にまで伝えるために道長や道長派の人々か

らのいらざる政治的な圧力を避けるためであったと、筆者は考えている。

古典の作者に限らず、人は誰もがそうであるが、ある限られた歴史的な空間の中で生きている。当然、いかに優れた作者であっても、自らの生きた時代の束縛を受けつつ、作品を書いている。心のおもむくままに文を書き連ねていく随筆であってもそれはかわらない。ましてや「徒然草」や「方丈記」とはちがって話題の材料の多くを宮廷内のことに求めた「枕草子」ではかなりの束縛があったはず。時の権力者の存在を十分に考慮しつつ筆を進めていった清少納言の息づかいに触れながら「枕草子」の世界に触れていくのは、この古典作品を理解していく上でかなり重要なことだろう。

もつとも日本古典文学を愛好している知人からは「そんなんは当たり前のことです。」と一喝されそうで怖いのだが。

【補足】

◇ 一条天皇の辞世の歌

藤原道長の圧力を受けながらも一条天皇は定子への愛情を変わずに死の時まで持ち続けたか。ことの真実は不明だがおもしろい史料があるので紹介をしておきたい。

一条天皇の死は寛弘八年（一〇一〇）六月二十二日のこと。定子の死の十年後である。一条天皇は定子の死後、一時的に定子の妹である御匣殿を身代わりのように愛したのだが、一年半後に御匣殿は亡くなる。

以後の数年間、一条天皇は政務はきちんと勤めながら、ただ定子の遺児たちを溺愛するだけで、彰子をはじめ后妃たちのほうを振り向くことはなかった。彰子が第二皇子の敦成親王を産むのは寛弘五年（一〇〇八）のことである。

一条天皇の死に至るようすは道長の「御堂関白日記」と行成の「権記」に書かれている。

六月十九日、病が悪化してもはや死を免れぬと悟った一条院（六月十三日に一条天皇はすでに三条天皇に譲位し上皇となっていた）は出家をする。その場には多くの高僧が控えていたが、その中には定子の兄である権僧都隆円もいた。そして二十一日亥の刻のこと。苦しい中、一条院は起き上がり、辞世の歌を詠んだ。弱々しい声だったためか、すぐ近くで聞いていた道長と行成とは聞き取った歌が少しばかり違う。最初に道長から

（院は）起き居給ふ。中宮も御す。仰せられてはいく『露の身の草の宿りに君をおきて塵を出でぬることこそ思へ』と。仰せられて臥し給ふ

「御す」とは「お側におられる」の意。道長はしっかりと娘の存在を意識して書き残している。「塵」とは「塵のようにはかない此の世」のことである。次は行成の「権記」。

亥の刻ばかり法皇（一条院のこと）しばらく起く。歌を詠まれてはいく『露の身の風の宿りに君をおきて塵を出でぬることぞ悲しき』と。その御志は皇后に寄するに在り。ただその意を指し知り難し。時に近侍する公卿・侍臣・男女・道俗のこれを聞く者、こ

れがために涙を流さざるはなし。

一条院の声が小さかったために二人が聞き取った歌の言葉は一部異なるが、「君」

を置いてこの世を去るのは辛いという大意は同じである。ただ「君」の解釈が違った。道長は一条院の側に控えていた娘の彰子ことだと理解した。しかし、定子崩御後は定子同情派となっていた行成の理解は違う。行成は「君」とは今は亡き皇后定子のことであると理解した。すでに十年も前に死んだ定子のことを「君をおいて」とするのは奇妙に感じるが、当時、懷妊中や出産に際してなくなった女性には成仏できず現世にその魂は漂っていると考えられていたので、行成の解釈も成り立つ。

もつとも行成もいうように一条院の辞世の歌は、道長が間近にいたためか、その真意が正確にはつかみにくく作られていた。そのため「近侍する公卿・侍臣・男女・道俗のこれを知る者」のうち何人が行成と同じ理解をしたかは、もちろん不明である。ただし、次のことはいいうる。

生前は「横川皮川」とまで悪評を浴びた定子であるが、中関白家に対して批判的な記述の多い「大鏡」にあっても定子に対する否定的な記述はない。といって村上天皇の後であった安子の嫉妬深く激しい性格について多く近侍する公卿・侍臣・男女・道俗のこれを知る者の記述を書き残している「大鏡」の作者が皇后ということで筆誅をためらったということではあるまい。定子の死して百年の後、定子に関する宮廷内の人々の記憶は行成のそれと同じようなものとなっていたのではあるまいか。

我がおくのほそ道の旅（11）

成瀬 和之

宇宙の旅から浮世に帰り、市振では遊女と別れ、金沢では一笑と別れましたが、山中温泉では、ついに曾良とも別れることとなります。

曾良は腹を病んで、伊勢の国長島（三重県桑名市）という所に親類があるので、そこへ先に行くことになったが、次の句を書き残した。

行き行きて倒れ伏すとも萩の原

曾良

病人の一人旅だから途中で行き倒れになるかもしれない。それでも、季節の花、秋萩が咲きほこる野原ならば、死んでも悔いはない

先に行く者の悲しみ、後に残る者のつらさ、それはちやうど、いつも二羽で飛行していた（おと）が、離れ離れになって雲間に迷うような気持ちである。そこで、私もこう詠んだ。

今日よりや書付消さん笠の露

今日からは一人旅だ。門出のとき笠に書きつけた（おと）の文字を笠に置く露と涙とで消してしまおう。

病気の曾良と別れて、一人旅を覚悟しなければならなくなった、苦渋に満ちた芭蕉の心境が句からにじみ出ています。芭蕉は大事な秘書役と別れるはめになってしまったのです。

「（おと）」は、河川や水田に棲むチドリ科

の鳥で、冬、南方に渡る。大きさは鳩ほどで、ケリリという鳴き声から「けり」と名づけられました。

曾良の句の「倒れ伏すとも」には、師を一人にするはめになった曾良の責任感が、裏返しに表明されています。どうせ師のお役にでない以上、野垂れ死にしても当然だという思いです。

当時、巡礼者は笠に、「同行二人」と書きつける習慣がありました。この場合、「二人」は仏と我との意です。これを、

芭蕉は自分と曾良に読み替えました。「書付消さん」には、文字を見るとたまらなくなるから、という悲嘆が隠されています。季語「露」に、笠に置く秋の露と、笠に落とす芭蕉の涙とを掛けています。金沢から福井の天龍寺まで、実は弟子の北枝が供をしてきたのですが、とうてい曾良に代わることはできませんでした。

（おくのほそ道）金角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス日本の古典参照

山中温泉には扇屋の別荘を再整備した「芭蕉の館」があり、芭蕉ゆかりの品や、伝統工芸「山中漆器」を展示しています。

また、玄関横に芭蕉と曾良の別れの場面が銅像で再現されています。その庭のにもみじが見事でした。山中温泉のシンボル「こおろぎ橋」から黒谷橋まで鶴仙溪遊歩道が整備されており、ここも、昨年十一月中旬のドンピシャの紅葉シーズンと重なり絶景が満喫できました。黒谷橋の側には、「芭蕉堂」が、一九一〇年に建立

され、芭蕉木像が安置されています。関西からも近く、秋の紅葉シーズンの那谷寺と山中温泉はお薦めです。

孫ウオッチング（23）

福田 圭

ついに、光君（ペンネーム）が話ことばを使えるようになった。二歳と一か月目である。「お父さんは？」と尋ねると、お父さんを指さす。「お母さんは？」と尋ねると、お母さんを指さす。「お爺ちゃんは何？」と尋ねても、こちらを指さしてはくれないが……。私の目を指さして「これは？」と尋ねると、「メ」と答える。耳を指さして「これは？」と尋ねると「ミミ」と答える。一月前には言えなかったのに。絵本の「ゾウ」を指さすと「ゾウさん」と言う。「キリン」を指さすと「キリン」と言う。すごい進歩だ。これから、爆発的に語彙が増えていくのだろう。感嘆する。

十月九日に弟の葵君（ペンネーム）のお宮参りをした。誕生日が七月二日だから、本来八月に行うのだが、暑いので、九月にずらしたのだ。光君も写真館で貸衣装のスーツを借りて、紫色のネクタイを締めてカッコよかった。葵君は十月三十日現在で、八キロになり、生まれた時の倍以上に体重になった。スヤスヤと寝ている。「寝る子は育つ」である。

普通の恋

大江 雉兎

「普通の○○って、いくらぐらいするんだろう？」という問いかけがあったとする。これでは漠然としているので「普通の食器」とか「普通の本」などに置き換えてもらいたい。日常的なシチュエーションで誰でも口にしがちの言い回しだが、質問に答える方には、この上ない難問である。ためしに「普通の食器って、だいたいいくらぐらいするんだろう？」について考えてみよう。この質問が超弩級の難問になるのは「普通の食器」が指しているものの幅が広すぎるからなのだが、質問する側はなにがしかのイメージの持っているはずである。この落差が話をややこしくしてしまう。この後、会話が進むとすれば、こんな具合だろうか。

「えーと、普通の食器って言われても、そうだね、デパートの日用品コーナーに並んでいる茶碗とかお皿を言っているのかな、モノにもよるけど……」

質問者を傷つけないよう、その意図を付度しつつ内容を絞り込んでいく。それ相応の会話術が求められるケースだが、そうした配慮がないと、こんなふうになるかも知れない。

「普通の食器ねえ、何をもって普通って言っているんだろうね、特別な日に使うわけではない普段使い品という意味か、リユースでない新品という意味か、作家

さんの一点物でない量販品という意味か、とにかく普通というだけじゃ何もわからんよ！」

前者はきわめて親切な返答であって、ぶっきらぼうな後者がありがちのパターンである。それでも「普通の」というのは思わず口をついて出る修飾語句である。このように「普通」という言葉は、使われる頻度は高いが、中身は極めてわかりづらい。しかも「普通」もしくは「普通の」の後にやってくる被修飾語によつて、受け取る側の反応もさまざまである。こうした問題を取り上げているのは、「普通の恋」なるものについて、少し考えてみたいと思ったからである。

唐突に「普通の恋って何だろう？」と切り出すと、先に挙げた食器論争みたいなやつてしまうので、最初からシチュエーションを具体化させて考えたい。ありがちな恋愛談義、常識の範囲で共感できる恋愛モノという方向性で考えるなら、主人公は年齢でいえば十代後半から上は三十歳代の前半ぐらいまでだろうか、とある男性と女性が互いの存在を意識し合っているいろいろな交流を重ねていく物語といったところだ。存在を意識し合ってたところ。日常生活の範囲内でおきた偶然から会話を交わすようになり、しかるべき時間の経過を伴って肉体的な交渉へと発展するというパターンである。

もし「普通の恋」という言葉が意味するところがこの説明に合致するなら、そ

の埒外に置かれるものは「普通でない」と認識されるし、そんな認識が多数的に成り立つのなら、そこでは相応の命名も行われる。たとえば年齢の問題。先の説明に当てはまらないということなので、十代になるかならないかぐらいの子どもが年長者に思いを寄せたとしよう。そういうケースには「幼い恋」というフレーズがしっくり来る。逆に高齢者の場合でいえば「老いらくの恋」という言葉が存在する。「幼い恋」や「老いらくの恋」なる言葉が、語法的に正当であるというだけではなく、内容的にも市民権を得ているのは、それらをモチーフとした映画やドラマがたくさんあることを思い浮かべればいいだろう。

うものなどなど、様相を説明的に列挙していくことはできるが、猟奇性・倒錯性が強いものが多い。結果、言葉レベルでの市民権は難しいようでお上品な（＝一般的）熟語はすぐには思い当たらない。「視姦」という言葉についても、そんな倒錯系のテクニカルタームは一般的ではないとするムキもおられることだろうが、サディスティックやマゾヒスティックといった言葉を一般枠で扱える程度の余裕があるなら、十分に許容されるものと考ええる。

年齢の問題、様相の問題が済めば、次は「とある男性と女性が」の部分である。「普通の恋」が異性間で成り立つものだとすれば、その埒外は説明するまでもないし、言葉は十分に市民権を得ている。

交渉の様相についてはどうだろう。会話から肉体へという展開を「普通」とするのなら、そうでないものについては確かに自立した言葉が与えられている。肉体的なところではなく精神的なところへの志向が強調されていると「プラトニッククラブ」なる言葉が与えられるし、肉体的な接触は求めずに相手を眺め続けることに性的興奮を覚えるケースには「視姦」という言葉が用意されている。非肉体的な交渉は他にもあるが、熟語的に認知されているかどうか。恋心が直線的に殺意に変わるもの、思いが嵩じて相手を殺したあげくに食ってしまうもの、肉体的な意味での見返りを求めるのではない物質的・金銭的な援助に充足感を覚えるとい

ておけばいいだろう。

以上、いくつかの局面にわけて考えてみたが、「普通の恋」を考えるのなら、まずはその埒外のものに目を向け、そうした類いのものではないという形での逆照射をするしかない。言葉そのものは、無意識のうちに口の端に乗せてしまう、まったく罪のないものだが、無邪気な顔をして残酷な真実を告げる子どものようなものなのかも知れない。

ちなみに、発端である「普通の恋」を問題にしたそもそのきっかけを最後に紹介しておこう。それは、とあるアニメの中で、登場人物であるアマチュアの漫画家が使った次のセリフである。

「前まで二次で百合やBL描いてたんですが今はオリジナルNL率が高くて…」

専門用語が多いセリフ、というか専門用語しか使っていないので、接点のない人には微塵も理解できないと思うが、細かい説明は省いておくとして、気になったのは「NL」の部分である。初めて音声で聞かされた時は、何と言ったのか聞き取れなかったのだが、アニメのセリフを書き出しているサイトで調べて「エヌエル」と言ったということを知った。そして、その意味は「ノーマラル」なのだとか。これはレズを意味する「百合」だのゲイの意味で使われる「BL」だのが市民権を得るなかで、それら以外の部分にも自立した名前が与えられるようになって使われ始めた言葉なのだという。

暗黙裡の認識だった「普通の恋」の埒外に名前を与えた結果、そこから逆照射される形で「普通」の部分に対する命名が改めて行われて「エヌエル」と呼ばれるようになったというのである。

命名行為は存在が認知された時に初めて行われる、命名すなわち存在であるとする立場を取るとするなら、NLなる命名が行われた時点で「普通の恋」はその存在を開始したと解釈できる。命名行為をめぐっては、名前を必要としない絶対者を始原的に認めるという立場もあるのだが、議論の対立が行き着く先は神の存在を認めるかどうかという神学論争である。ここで触れたのはアニメを題材にしたの「普通の恋」なので、神もへったくれもないタワゴトなので、そんな高尚な哲学的命題とは無縁のようだが、深いところではつながっている。

埋め草

日本ではもともと馴染み薄なのになぜか大きく注目されるイベントがある。十月三十一日のハロウィンのことだ。祝祭本来の意味には目もくれず、仮装パーティーの側面だけがクローズアップされる現状については批判も少なくないが、仮装をまとうて街に繰り出す若者にすれば楽しければそれでよし、場を提供する業者にすれば儲かるんだから結構毛だらけ猫

灰だらけというのが本音のようだ。確かに仰せの通りであって、街の器物を破壊したり、ゴミを散らかしたりなどがないよう気をつけてくれるなら、ご自由に楽しんでくださいと言っしかな。

それに日本的ハロウィンに対して文句を言うなら、同じ目線でクリスマスやバレンタインズ・デーについても小言を並べる必要がある。クリスマスなどは時間的な積み重ねがあつて日本的風習に同化していると弁護するとすれば、ハロウィンも数十年は様子見をするべきだ。そして定着したかどうかを判断してから物申しても遅くはない。いずれにせよ、現状の日本風ハロウィンに対しては違和感を覚える部分が多いかも知れないが、それはそれとして流しておくしかない。

ということ、ここからが本題、もともとは日本のものではないイベントについての話である。クリスマスが大切な年中行事として根付いているキリスト教文化圏では、十二月になった段階で使用されるカレンダーがあるという。アドベント・カレンダーと呼ばれるもので、それが今回の主役である。

十二月一日から二十四日までの二十四日間を数えるように設定されているのがアドベント・カレンダーで、宗教的な意味合いを言うのならキリストの降誕日をカウントダウン形式で待ち望むということらしい。降誕日に先立つこの期間をアドベントと呼び、その名前を冠しているところからも分かるように、本来は宗教色

の濃いアイテムなのだが、一般的には子供向けのクリスマス・グッズとして使われることが多いそう。カレンダーの上には十二月一日から二十四日までの各日に対応するポケットが並んでいて、それぞれにはキャンディーやチョコレートなどが入っている。そのポケットを一日に一つずつ開けていき、二十四個のポケット全てが開くと本命のクリスマスプレゼントが貰える日になるというわけである。

西洋の祝祭から本来の宗教性を取り除いて、一過性のイベントを楽しむのが日本の受容だとすれば、降誕日を三週間以上前から待ち望む習慣自体、まどろっこしい。しかし、アドベントそのものをイベント化する発想なら、いくらかは楽しめそう。その一つが、WEB版アドベントカレンダーである(<https://adventar.org>)。これは十二月一日から二十四日まで一日一本ずつ記事を投稿することのできるプログラムで、設定されたテーマに即する話題を参加者(複数でもいいし、一人でも構わない)が並べていく。WEB上の記事を日付に関連づけて整理する点ではWeb・Log、つまりブログと呼ばれるシステムと同じなのだが、標準的なブログと異なるのは、それぞれの記事が指定日にならないと公開されない点である。額面通りに、その日になって新しく記事を作成するのもいいし、前もって用意しておいたものを投稿しても構わない。あるいはWEB上の既出記事や非公開記事へのリンクを所定の日に公開するとい

うこともできる。

ここで注目したいのは三つめのパターンだ。リンク機能を用いて公開する記事を調整するというのは、工夫次第では二十四日すべての内容を予めの計画に沿って配置することになるので、日次に従ってイベントが進行しているように見せかけることができるということである。ブログは時々思いつきで書き散らされる傾向が強いので、全体的なまとまりは失われがちである。それに対して、リンクを所定日に公開していく形式は、見た目はブログと同じであっても、実は事前に計画を作っておくことができるため、トータルでのまとまりも作りやすい。アドベント・カレンダーのスタイルを借りながら、そうした仕込みのもとで企画を進めることができるという意味で、多くの可能性が感じられる。

もともと事前の構想が不十分だと、結果的には二十四個の記事が無秩序に並ぶだけになって新機軸の効果も現れない。先述のサイトには、今年もたくさんアドベント・カレンダーが作成されているが、そのほとんどは場当たりのテーマを設定しただけのように見受けられる。その意味では参考になるものはほとんどないと言わざるを得ないのだが、日次に従って記事が公開されるスタイルは、期待値だけでいうなら決して小さいものではない。

ということ、ひとつアイデアを出してみたい。新聞の折り込みチラシでよく

見かけるが、スーパーの広告には曜日別の特売品をアピールするものがある。月曜日は精肉の日、火曜は魚介類の日、水曜は野菜の日とかのアレである。あのスタイルは曜日とサービス品目を対応させているわけだが、それを日付と記事との対応という形にアレンジして、日毎に順次オープンしていくように設定するわけである。物販店のPR目的で作るとすれば、一日は商品Aが半額、二日はBが半額……といった形になるだろうし、イベント告知に利用するのなら開催日時や会場などの要項を小分けにして順次公開していく形式にすることができる。PR目的のものではなく、映画や小説のような創作物に対する評論風の文章であっても、梗概から始まって登場人物の紹介などセクションを順次並べることになるので援用はできる。

とはいえ、実際のところは試しにでもWEB版アドベント・カレンダーを一つでも作ってみないことにはわからない。それにアドベント・カレンダーそれ自体への誘導ができるかどうか問題になる。最近の流行でいえばツイッターやインスタグラムなどのSNSが個人とWEB空間とを繋ぐ有力な架け橋とされているのだが、ちっぽけな投稿がすぐさまに反響と結びつくはずはない。それでも何かの企画を始める時の手段の一つとして、アドベント・カレンダーなるものを知っておいて損はない。

編集後記

秋が早く終わり、冬の気配を感じる今日の頃です。もうすぐジングルベルが鳴り出し、正月もすぐに来ます。月日が経つのは早いです。

衆議院選挙は残念な結果になりました。益々、安倍政権は独裁政権になって、憲法を改正し自衛隊の海外での戦闘行為を可能にし、アメリカの要請があれば、世界のどこでも派兵されるでしょう。

昔、韓国がアメリカの要請でベトナム戦争へ軍隊を派兵し多くの兵が死にました。同じことが起きる可能性があります。憲法九条の精神をもう一度、みんなが理解し国民の共通認識にしなければ、軍備増強が止まらなくなります。

私自身の自戒も込めて思うのですが、今回の選挙結果をみて、日本人の政治意識は低いと思います。諸外国と比べても投票率は最低に近く、関心も低いです。政治に無関心で何もせずに自分たちの生活が良くなることはありません。

絶望の選挙結果ですが、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師が言った言葉を噛みしめたいと思います。

「絶望の山に分け入り、希望の石を切り出さなければならぬ」

(嘉)

「広告

電子書籍のご案内

「埋め草」のタイトルで芥川だよりに寄稿してきました文章を、電子書籍の形式にまとめました。AMAZONにて販売開始。



埋め草 (山紫水明文庫) 2017/11/3
office34、大江雉兔
Kindle版

京都歩きツアー

神宮道石碑探訪

いしづみが伝える記憶

平安神宮前から知恩院や円山公園に通じる神宮道。賑やかな観光ガイド目線からは見落とされがちなこの場所は、記念碑や顕彰碑が集中する隠れ名所。石に刻まれた声なき声に耳を傾けてみましょう。

主催：京都クルーズ・ザ・プロジェクト

日時：12月10日／参加費：一〇〇〇円

申し込み・お問い合わせ

京都クルーズ・ザ・プロジェクト

Office34@japan.email.ne.jp

<http://kyoto-cruise-sakura.ne.jp/>

TEL 075-711-5659

思い出にひたる

「新米が出来たよ、いつでもど
うぞ」

実家の弟から元気な声が聞こえて
くる。

「よっしゃ、墓参りも兼ねてゆく
か」と。

昨日まで降った雨も今日は、さ
わやか。丹波の風景を車中から眺
めて、いろんな想い出が走馬灯の
ように流れてゆく。

「ああ、田舎に黒豆がたくさんあ
るわ」

篠山を通過しているのに、運転
手は知らぬ顔。

のどかな風景が広がっている。
今は、あまり見かけなくなった

天日干しんの棒かけや、はさ掛け
はないけれど、秋の農村にはよく
似合っている。一粒の米もムダに
出来ないと落ち穂拾いをしたもの
だ。

そんなことを話し会う人も見か
けなくなった農村に一人いる友達
に会いにゆく。
話はずきない。

「ゆつくり話そう、泊まって帰れ」

手を離さない。涙がスーッと流
れ尚淋しさを表し別離が苦しい。

車中から見ると、両手をかざし
て手を振ってくれている姿。

「また、来年も来るから元気でい
てよ」

届かぬ声を振ってしぼる。

秋の一日、陽が沈むのも懐かし
い思い出である。

私の四箇条

心なしか空が高い。うろこ雲が
広がる。

道すがら少し冷気をはらんだ空
気を吸えば足取りも軽くなったよ
うな気分。

「一〇年目の命日」ひとり感傷的
になっている。本堂から坊さん
のお勤めか、木魚、かねの音が鳴り
ひびいている、墓前で。

「早や一〇年になるのやネ」と話
しかける。

木々がざわざわと音を立てて返
事をしてくれる。

座して静かに聞く。いろんな想

いが湧きたつてくる感情。

私の四箇条

一、周囲に対して気配りが出来な
くなったとき

一、自分の行動が他人様の迷惑に
なっていると気が付かなくなった
とき

一、何事も自分本位になったとき
一、最後は開き直り正当化すること

まだ、こんなことを考えて、生
き方を決意しようとしています。

俳句

土田 裕

ほろ酔ひで

降り立つ駅の夜寒かな

まだ青きものも混じりて

木の実落つ

街灯の点くを合図に虫時雨

バス待つや時刻表にも秋時雨

古傷を舐め合ふ二人新酒汲む

影山武司

すずめらの

低く飛び込む稲穂波

雲が雲追ひ越してゆく

野分かな

駅弁の紐のするりと天高し

国訛り添へて出さるる芋煮汁

聖堂の影に抱かるる良夜かな

影に影重ねて蒼し月の谷

月浮かぶ黒き瞳の小宇宙

桑の葉を鳴らして肥ゆる秋蚕あきこかな

母の手の皺に洗はる衣被きぬかつぎ

鳩笛の指より漏るる息の老い

